

資料紹介 動物遺体の収集

大島光春 (学芸員)

はじめに

今回は一般にはあまり知られていない博物館活動を紹介したいと思います。動物遺体の収集です。「博物館といえば展示」と思われがちですが、資料の収集、保管、調査研究も大切な仕事です。

資料を収集し、きちんと標本として整理し、保管します。保管された標本はそれらの資料そのものが研究されたり、他の標本との比較のために使われます。もちろん他の博物館や大学からも利用されますので、博物館ではその分野の専門の学芸員がいなくても、標本を収集し、整理・保管しています。

動物遺体の収集

動物遺体の収集にはいくつかのルートがあります。最も多いのは県立自然保護センターから運ばれてくるもの。次に横浜市の野毛山・金沢動物園から献体として提供されるもの。その他、猟友会や一般の方、行政機関から連絡がある場合や他の動物園や水族館から提供されるものなどです。

自然保護センターからは県内産の野生動物が運ばれてきます。交通事故や栄養失調、病気などで弱った動物が自然保護センターへ運ばれ、治療を受けますが、その甲斐無く死んでしまうものも多くいます。そうした動物は解剖され、「野生動物の保護に関する情報交換会」に参加している日本獣医畜産大学、日本大学、森林研究所で血液、臓器、筋肉、便などが分析されます。骨は当館へ運ばれ、骨格標本となります。こうして集められたデータはそれぞれの研究機関の成果として発表される一方で、自然保護センターへ送られ、野生動物保護活動のための基礎データとしてまとめられます。1996年より始まったこのデータの蓄積はシカ・カモシカを中心にすでに50体を越えました。



写真1. 野毛山動物園から献体されたオランウータン。先に死んだオス(右)の後を追うようにメス(左)も死んでしまいました。今年2月に生命展示室で夫婦が再会しました。

野毛山動物園や金沢動物園からは世界中の珍しい動物が献体として提供されます。ワシントン条約の規制の対象になっている動物は博物館といえどもほとんど手に入れることはできません。そこで動物園で飼育されている動物はとて貴重なのです。動物園で大型の動物や珍しい動物が死ぬと、博物館へ連絡が入ります。そして、公用車のライトバンで受け取りに行くか、トラックを借りなければならぬかなど判断し、遺体と動物のデータを受け取ります。これまでにオランウータン(写真1)、インドサイ(写真2)、オオアクリイ、ボンゴ、マレーガビアル、ヤマネコ他貴重な献体を提供していただきました。

こうして博物館へ集められた遺体は、すぐに処理する時間もお金もない場合が多いので、一旦マイナス20度の冷凍庫で凍らされます。冷凍庫は四畳半くらいの広さがありますが、油断するとすぐに一杯になってしまいます。

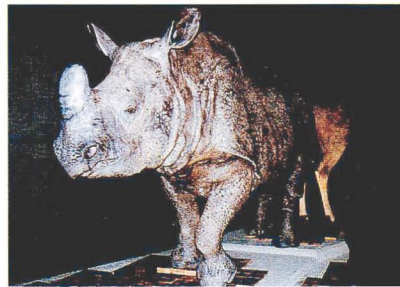


写真2. 金沢動物園から献体されたインドサイ。1995年(開館の年)の仕事始めはこのサイの遺体収集でした。今年2月より生命展示室に登場しました。

解剖

オランウータンを例に挙げると、解剖され、骨格と剥製の標本になりました(写真1)。オランウータンを解剖できる機会というのは大変貴重なので、まず大学や博物館の先生方に解剖を行う事を案内しました。この日は東京大学医学部解剖学教室の大塚先生と東京芸術大学美術解剖学教室の宮永先生をはじめ、解剖学を学んでいる学生さん達も大勢いらっしゃいました。

解剖は前日の準備から始まります。まず遺体を冷凍庫から出して、大型標本作成室に運びます。動物園からの献体の場合、病理解剖のために内臓は取り除かれているので、1日あれば解凍できます。それから解剖刀、メス、ピンセットなど

の道具を用意します。

当日は剥皮から始め、表層の筋から順に確認しながら剥がしていきます。前肢帯(肩付近)の筋、後肢帯(腰付近)の筋を切断し、脚を見ていくグループや、表情筋や咀嚼筋など頭部を見るグループに分かれて進みました。最後に骨から肉をできるだけ剥がし、骨は骨格標本を作るために水に漬けます。毛皮は剥製にするために塩漬けにし、肉は集めて業者が回収に来るまで冷凍にして作業終了です。ここまで、急いでも丸1日、丁寧にやれば3、4日を要します。

なぜ解剖するのか

古生物を専門にする私が、なぜ現生動物の解剖をするのか?とよく聞かれます。

哺乳類の化石はふつう、歯か骨しかありません。しかもほとんどは破片など断片的なもので、1頭丸ごと産出するようなことは極めて稀です。そこで化石となった動物の種類や大きさを知るためには、骨や歯の特徴を細かく知っていなければなりませんし、比較するための標本も重要なのです。また、化石の骨についての筋肉の痕から筋肉を復元し、その動物が生きていたときの姿や生活の仕方を推定することがあります。このような方法は絶滅した動物の場合特に重要なのです。したがって、古脊椎動物の研究をしようとする、現生動物の解剖学の知識と骨格標本が必要なのです。

おわりに

動物の遺体は山では風化してしまいますし、動物園では焼却されてしまいます。博物館では失われた命に、もう一度、そして未永く生きてもらうために、標本化をおこなっています。少人数で少ない予算の中での活動なので、標本にできる動物の種類も数も限られてしまっていますが、続けることで蓄積されると信じています。

最後になりましたがこの場を借りて日頃から博物館の資料収集にご協力頂いている諸機関や皆様に厚くお礼申し上げます。

自然科学のとびら

第4巻第1号(通巻第12号)

1998年3月15日発行

発行所 神奈川県立生命の星・地球博物館

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499番地

Tel:0465-21-1515 Fax:0465-23-8846

発行人 濱田隆士

編集 佐藤武宏・鈴木智明

印刷所 フルサワ印刷株式会社

自然環境保護のため再生紙を使用しています